

(様式 3)

G-34 光風病院における精神科入院患者の処方調査について～第二報

○開田 郁代、野津 和良、田中 将太、横田 哲子、田中 雅子
(光風病院 薬剤部)

【はじめに】

昨年度、当院では精神科入院患者への向精神薬の処方調査を初めて実施し、その状況を把握したところである。

本調査は定期的の実施することにより、日々の薬剤管理業務に活用でき、向精神薬の適正使用にも役立てることが出来るものである。

そこで、今年度も継続して処方調査を行ったところ、当院の問題がより明確となったので、その結果について報告する。

【方 法】

調査対象は昨年度の調査日から丁度1年後となる平成27年4月15日現在における当院の入院患者180人(男性108人、女性72人)とし、4月15日時点の処方内容をもとに、昨年度同様に患者一人に対する抗精神病薬、抗うつ薬、抗不安薬及び睡眠薬の処方剤数を調査した。抗精神病薬についてはCP換算値も算出した。

【結 果】

抗精神病薬の処方状況は図1のとおりであり、多剤処方では昨年度同様、統合失調症患者に多い傾向が見られた。

疾患	1剤	2剤	3剤	4剤	単剤処方率(%)
F0	2	1	1		50.0
F1	15	1			93.8
F2 (統合失調症)	35 (29)	31 (29)	16 (13)	4 (4)	40.7 (38.7)
F3	11	4			73.3
F4	4	7		1	33.3
F5	3	1			75.0
F6			1		0.0
F7	3	1			75.0
F8	5	4		1	50.0
F9	1				100.0
合計(人)	79	50	18	6	51.6

＜図1 抗精神病薬の処方状況＞

全患者の単剤処方率は昨年度の43.3%から51.6%に、統合失調症患者のみの単剤処方率も昨年度の27.6%から38.7%とやや上昇していた。4剤処方されていた患者は6人おり、うち4人が統合失調症患者であった。

抗精神病薬のCP換算値の分布は図2のとおりである。全体の平均値は725.5mgであり、昨年度の757.8mgよりは減少していた。しかし、1000mg以上の患者が依然43人(28.1%)おり、特に統合失調症患者のみでは949.8mg(昨年度979.1mg)と更に高い数値であった。

持効性注射薬が処方されている患者は7人いたが、うち注射薬単独は2人(28.6%)のみであり、他の5人は経口薬を併用していた。単剤の場合のCP換算値は800mg未満であるが、多剤の場合はいずれも1000mgを超え、全体の平均値は1229.1mgと経口薬だけの場合よりも高い数値であった。

疾患	CP (mg) 600>	600≤ < 1000	1000≤ < 2000	2000≤	平均値 (mg)
F0	2		2		806.3
F1	15	1			182.8
F2 (統合失調症)	31 (25)	21 (20)	27 (23)	7 (7)	924.0 (949.8)
F3	5	8	2		666.7
F4	9		3		615.1
F5	4				108.0
F6			1		1293.0
F7	4				197.0
F8	5	4	1		518.4
F9	1				300.0
合計(人)	76	34	36	7	725.5

＜図2 抗精神病薬のCP換算値の分布状況＞

抗うつ薬は処方されている患者24人全てが単剤処方であった。抗不安薬は49人に処方されていたが、統合失調症患者1人に2剤が処方されている他は全て単剤処方であった。一方、睡眠薬の単剤処方率は63%であり、121人中8人に3剤以上の処方が見られ、うち6人は統合失調症患者であった。

【考 察】

2年間の調査で、当院では抗精神病薬と睡眠薬における多剤大量処方が問題であることが明確になった。

精神科臨床薬学研究会が実施した2014年の処方調査結果(全国127施設、統合失調症患者17,400症例)では抗精神病薬の単剤処方率は38.3%、CP換算値の平均値は776.8mgであり、これと比しても当院では特に統合失調症患者のCP換算値が高いことが問題であると言える。

今回初めて調査した持効性注射薬の使用状況でも経口薬との多剤併用及び高いCP換算値が確認された。

抗精神病薬の併用による明確な有効性を示すエビデンスは乏しく、逆に大量投与による死亡率リスクの増加が知られている。昨年はパリペリドン水懸筋注による死亡事例も問題となり、適正使用ガイドでは経口薬との併用は行わないよう注意喚起されているところである。

また、睡眠薬の多剤併用は当院だけに限らず、諸外国と比べ日本の使用量は多いことが従来から指摘されている。併用による有効性よりも転倒や持ち越し効果等の副作用が出やすいことが問題とされており、処方の見直しが求められている。

今後も薬剤師として、薬剤に関する正しい情報の提供や処方提案等を積極的に行い、さらに多剤大量処方の改善を図っていきたい。また、定期的な処方調査を継続し、医療スタッフと情報を共有しながら向精神薬の適正使用に努めていきたい。